

李 啓充(著)

市場原理に揺れるアメリカの医療

黒川 清
(東海大学医学部長)

「市場原理に揺れるアメリカの医療」がついに一冊の本として出版された。「ついに」と私が言うのは実はこのシリーズが1996年から医学書院発行の「週刊医学界新聞」に連載されたときから大変面白く、その内容の正確さに感心して毎回非常に興味を持って読んでいたからである。しかもこれは、まさにアメリカの医療の改革における、いわゆる「マネージドケア」の導入から始まり、それに対して大学あるいは病院が急速に対応を行ってきた時期にこの連載が始まっているからである。

著者の李先生はハーバード大学で研修・研鑽を積み、現在助教授としてご活躍の方であるが、このアメリカの医療を巡る多くの経済的な動きやビジネスの動き、それに対する医療現場での様々な問題、社会的な問題、さらに患者と医師との関係、病院との関係などについての多くの問題点や苦悩を、極めて正確にしかも臨場感溢れるタッチで書いている。私はその都度コピーをとっていたが、出版元あるいは著者にこれは必ずいつか一冊の本にして出してもらおうと書こうと思っていたぐらいであり、これがいよいよまとまって出版されたことは大歓迎である。しかも著者のいるボストン周辺での様々な医療に関する話題、例えば「あるガン患者の手記」や「ダナ・ファーマー事件」「スター選手の死」などが極めて興味深く書いてある。日本の医療現場の人にはなかなか分からない、そして理解できないこともあるかもしれないが、私のように長年アメリカにいたものにとっては誠に身にしみるような筆の進め方であり、面白い読み物になっている。

この本の素晴らしい所で、ここに書いていることが非常に今日的である1つは、いよいよ日本でも医療制度の改革が叫ばれ、行政も与党も日本医師会も改革案を示していることに表れている。急速に悪化する日本

の経済状況、急速に高齢化してくる社会と医療費の増大などから、昭和36年以来の国民皆保険がいよいよ行き詰まっていることに対して大きな改革を迫られているところにある。皆さんも毎日の診療あるいは教育の現場でも、従来のような教育あるいは研修とは全く違って、これからは効率のよい、しかも質のよい医療を提供しなくてはならず、これらを考える上で常に「経済」を考えなければいけないということが現実的になってきたからである。日本の色々なシステムは異なる文化的、歴史的背景があるにしても、世界の他の国と同じように、やはりアメリカの経験、システムを分析してそれを修正しながら取り入れてくるということが重要である。この点では、アメリカで急速に導入され、それなりの問題を含みながら現在、修正過程に入ってきているいわゆる「マネージドケア」が、いよいよ日本にも西暦2000年を目指して導入されつつある現在、李先生のこの本が出版されたことは誠にタイムリーであろう。我々医療に係わる者、また医学教育に係わる者、そして医学の研修、医療現場に係わる全ての人にとって大変参考になる面白い読み物といえる。

このような改革の波が襲いかかるときに、日本は何をするのかということがいつも問題になる。日本特有の文化、今までのシステムとかなり違うなど色々な理由を言いながら、なかなか変わらないといっていることが多いこの頃ではないだろうか。これは何も医療だけではなく、金融システムの問題、官僚の腐敗の問題、官民の癒着問題等々にも表れている。医療の改革にしても、しなければならないけれど何もできないという悩みの根本は、実は「決断力」と「決心」と「変わりたいくない」という色々なファクターによって、欲求不満こそ積み上がってくるものの、なかなか決断ができないという全ての分野での共通の問題として認識できるであろう。この連載は大変参考になる読み物であり、日常の研究や診療で恐らく多忙であろう著者がその合間にこれだけ我々の参考になるものを書いてくれたことに感謝し、これからのさらなるご活躍を心から期待したい。

●A5 200頁 写真18 1998 定価(本体2,200円+税) 〒400 医学書院・刊)